



うさぎの毛

古来、野兎は狩獵の対象とされ、肉や骨は食用、毛は筆などの材料に用いられました。中国、湖南省長沙市の出土品から、紀元前 300 年頃にはすでに兎毫の筆が作られていたことが知られます。のちに兎毫は筆の代名詞となり、茶碗の文様などにもその名が当てられました。



41 米庵蔵筆譜 Collection of Chinese Brushes

幕末の書家・市河米庵所蔵の唐筆の図録です。兎毫の筆は上等品とされ、日本でも古くから用いられてきました。



42 黒釉兎毫斑碗 Tea Bowl with "Hare's-Fur" Glaze

喫茶用の茶碗で、漆黒の釉の上に銀色の細い線条が現われています。中国ではこれを兎の毛に見立て兎毫と呼びました。

展示作品リスト

No.	名称	地域	作者	出土等	時代・世紀	寄贈	所蔵／当館所蔵は列品番号
第1章 兎に角うさぎ							
1	博物館獣譜	博物館編	明治時代・19 世紀				QA-956-2
2	染付水葵に兎図大皿	伊万里	江戸時代・19 世紀			平野耕輔氏寄贈	G-4467
3	藍釉兎	中国	唐時代・8 世紀			横河民輔氏寄贈	TG-1427
4	雪梅群兎図	中国	沈銓筆 清時代・康熙 55 年 (1716)				個人蔵
5	黒釉兎唐草文双耳大壺	中国	元時代・13～14 世紀			横河民輔氏寄贈	TG-802
6	染付兎形皿	御深井	江戸時代・19 世紀				G-993
7	織部兎文硯	美濃	江戸時代・17 世紀				個人蔵
8	兎水滴	江戸時代・18～19 世紀				渡邊豊太郎氏・渡邊誠之氏寄贈	E-20444
9	兎水滴	江戸時代・18～19 世紀				渡邊豊太郎氏・渡邊誠之氏寄贈	E-20447
10	兎水滴	江戸時代・18～19 世紀				渡邊豊太郎氏・渡邊誠之氏寄贈	E-20448
11	兎水滴	江戸時代・18～19 世紀				渡邊豊太郎氏・渡邊誠之氏寄贈	E-20453
12	耳長兎水滴	江戸時代・18～19 世紀				渡邊豊太郎氏・渡邊誠之氏寄贈	E-20455
13	白玉兎合子	中国	清時代・18～19 世紀			神谷伝兵衛氏寄贈	TG-1669
第2章 月のうさぎ							
14	玉兎搗薬文磚	朝鮮	楽浪・1～3 世紀			小倉コレクション保存会寄贈	TJ-5030
15	玉虫厨子背面台座画（模本）	明治時代・19 世紀	原品：飛鳥時代・7 世紀、奈良・法隆寺蔵				P-427-2
16	十二天像（月天）	室町時代・15 世紀				神谷伝兵衛氏寄贈	A-1051-7
17	方格規矩鏡	中国	前漢時代・前 1 世紀				TJ-602
18	月宮八棱鏡	中国	唐時代・8 世紀				TE-257
19	染付吹墨亭兎図皿	伊万里	江戸時代・17 世紀				G-5789
20	兎蒔絵印籠	江戸時代・19 世紀				クインシー・A・ショー氏寄贈	H-306
第3章 波に乗るうさぎ							
21	波兎蒔絵旅櫛笥	江戸時代・17 世紀					H-460
22	波兎文象嵌鍔	江戸時代・17～18 世紀					F-20004
23	金茶糸素懸威波頭形兜	江戸時代・17 世紀					個人蔵
24	火事装束 紺麻地波兎雨龍模様	江戸時代・19 世紀				アンリー夫人寄贈	I-3689
第4章 うさぎはどこだ							
25	仏涅槃図	鎌倉時代・14 世紀					A-11354
26	売玩郎図	中国	呂文英筆 明時代・16 世紀				TA-345
27	兎水鳥鏡	岐阜県瑞浪市土岐町 桜堂経塚出土	平安時代・12 世紀			柳孝氏寄贈	E-20191
28	広寒宮螺鈿合子	中国	元時代・14 世紀				TH-18
29	豆兎蒔絵螺鈿硯箱	伝永田友治作	江戸時代・19 世紀				H-4609
30	海土玉採図石菖鉢	山尾侶之作	明治 6 年 (1873)			ウィーン万国博覧会事務局寄贈	E-13009
31	金地花兎文様金襴 花兎金襴	中国	明時代・15～16 世紀				TI-190-9
32	四代目市村竹之丞の舟前大あたり	西村重長筆	江戸時代・18 世紀				A-10569-41
33	見立行平・松風・村雨	鳥居清満筆	江戸時代・18 世紀				A-10569-439～441
第5章 うさぎと人と							
34	大黒様に白兎	葛飾北斎筆	江戸時代・文政 2 年 (1819)				A-10569-6000
35	卯の春	柳々居辰斎筆	江戸時代・文政 2 年 (1819)				A-10569-6028
36	青花唐子文鉢	中国	景德鎮窯 明時代・嘉靖年間 (1522～66)			横河民輔氏寄贈	TG-2012
37	吉例 兎の年礼噺	蓮池堂画	明治 5 年 (1872)				P-3702
38	玉兎黄金の酉年	蓮池堂画	明治 5 年 (1872)				P-3703
39	高連不連 兎の盛衰	一斎小芳盛画	明治 6 年 (1873)				P-3753
40	管城二譜	細井広沢筆	江戸時代・正徳 5 年 (1715)			高木五郎兵衛氏寄贈	B-37
41	米庵蔵筆譜	市河米庵編	江戸時代・天保 5 年 (1834)			徳川宗敬氏寄贈	QB-9981
42	黒釉兎毫斑碗	中国	建窯 南宋時代・12～13 世紀			横河民輔氏寄贈	TG-811



2 染付水葵に兎図大皿
Large Dish with Rabbits and Pondweed
幕末に焼かれた伊万里焼の大皿です。お話ししているような愛くるしい兎の部分はレリーフ状に盛り上がっています。

令和 5 年 (2023)
1 月 2 日～1 月 29 日
東京国立博物館 平成館企画展示室



特集

Thematic Exhibition
New Year's Celebration at the Tokyo National Museum: The Year of the Rabbit

博物館に初もうで

兎にも角にもうさぎ年

新年あけましておめでとうございます。早いもので令和も 5 年目を迎えました。令和 5 年は癸卯の年、うさぎ年に当たります。今日ペットとして人気のうさぎは、古くから愛玩動物として、あるいは狩獵の対象として、人間にとって身近な存在でした。そもそもうさぎには野兎と飼兎の 2 種があり、現在ペットとして主流の飼兎は、室町時代の終わりにヨーロッパから南蛮貿易を通じて日本に伝えられたとされます。一方の野兎は、もともとと生息していたその土地のうさぎで、近代以前の造形作品に表わされているのは、多くがこちらです。

この特集では、日本を中心とした東アジアのうさぎたちに五つのテーマから迫り、造形作品を通じて人とうさぎが紡いできた豊かな関係を探ってみたいと思います。さまざまなしぐさやかたちのうさぎをお楽しみいただき、新たな年の門出としていただければ幸いです。

兎にも角にもうさぎ年。うさぎに角はありませんので、角を立てないで、ぴよんと飛躍の年となりますよう、お祈り申し上げます。

2023 is the Year of the Rabbit. Rabbits have been a part of people's lives for a long time, both as pets and as game animals. This exhibition explores the deep connections between rabbits and humans through five themes and dozens of artworks from Japan and other parts of East Asia. We hope you enjoy the diverse shapes of these artworks as we jump into the New Year.



特集 博物館に初もうで
兎にも角にもうさぎ年
令和 5 年 (2023) 1 月 2 日発行

執筆：清水健、六人部克典 撮影：藤瀬雄輔、吉岡由哲ほか 翻訳：足立奈緒子（以上、東京国立博物館）
デザイン・制作・印刷：アイワード 編集・発行：東京国立博物館
©2023 東京国立博物館 Tokyo National Museum



せつばいぐんとず
4 雪梅群兎図
Rabbits under a Snowy Plum Tree

江戸時代に人気を博した中国人画家の沈銓(号南蘋)が、鮮やかな彩色と緻密な毛描きで、つぶりとした鋭い目の兎を描きます。



みみながうさぎすいてき
12 耳長兎水滴
Water Dropper Shaped Like a Rabbit with Long Ears

水滴は硯で墨を磨る際に使う水を入れる容器です。耳を強調した兎には「波乗り兎」のイメージが重ねられています。



そめつけうさぎがたさら
6 染付兎形皿
Rabbit-Shaped Dish

正面から捉えた兎をそのまま皿にしたものです。名古屋城内で焼かれた御深井焼の作例と考えられます。

月にうさぎが住むという伝承は、古代の中国で生まれ、日本を含む東アジアに広まりました。月には桂の木が生えていて、ヒキガエルとうさぎが住むと考えられ、月を表現する際にはそれらが象徴として表わされました。そして時代が下ると月はうさぎを彩る景物となっていくのです。

月のうさぎ



裏面

うさぎまき え いんろう
20 兎蒔絵印籠
Case (Inrō) with Rabbits

印籠の表裏に、2羽の兎と、月に秋草を表わしています。兎は月を抜け出して、月とともに表わされるようになりました。

げっせうちはりようきやう
18 月宮八稜鏡
Bronze Mirror with the Moon Palace

向かって左の木の下に仙薬を掲ぐ兎を表わしています。兎は下に表わされた蟾蜍とともに月に住むと考えられていました。



波に乗るうさぎ

日本では室町時代以降、江戸時代を中心に、うさぎが波に乗る姿が好んで造形化されました。謡曲の詞章がもとになっているといわれています。月のうさぎが展開し、月影が白く水面に浮かぶさまを、うさぎが波の上を走る姿に擬えたのでしょう。そしてうさぎは火災を防ぐ火伏せの象徴ともなるのです。



かじしやうぞく
24 火事装束
Fire-Resistant Wear with a Rabbit, Waves, and Rain Dragon

高くしぶきを上げる波の上に赤い兎が配置されています。火伏せの意味で、水に関係のある模様が施されました。

なみうさぎまき え たびくしげ
21 波兎蒔絵旅櫛箱
Travel Case for Cosmetics with Waves and Rabbits

波間を耳の長い兎が飛び交うさまが全面に表わされています。水面に映った月を、波の上を走る兎に見立てたものです。

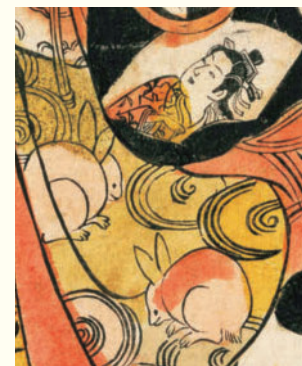


工芸品や絵画には、うさぎが意外な位置に隠れていたり、一見どこにいるのかわかりづらかったりするものもあります。着物や器物の意匠のなかにも、箱の蓋裏などにも。さあ、じっくりと目を凝らしてご覧ください。一緒に「どこだ、どこだ」と、うさぎ探しをいたしましょう。



よだいめいちむらたけのじやう
32 四代目市村竹之丞の
丹前大あたり
The Actor Ichimura Takenojō IV

浮世絵に描かれた、歌舞伎の伏客役の伊達姿。羽織には当時最新の大首絵の扇面、着物には兎が大胆に配されます。



あまたまとりずせきしうばち
30 海土玉採園石菖鉢
Planter for Japanese Sweet Flag with a Scene of Sailors Retrieving a Sacred Jewel

兎たちが踏ん張って大きな鉢を支えています。一方、短側面には波に兎の意匠が表わされています。



まめうさぎまき え ら でんすりばこ
29 豆兎蒔絵螺鈿硯箱
Writing Box with a Bean Plant and Rabbit

箱の蓋表から身の側面にかけて豆の枝葉が表わされています。蓋を開けるとその裏に兎が息をひそめて隠れています。



蓋裏



うさぎと人と

うさぎと人との関係は古く、紀元前3世紀頃には十二支の「卯」にうさぎが割り当てられました。ときには擬人化されたり、その毛(兔毫)で筆が作られたり。うさぎは人びとの営みのなかでさまざまに取り上げられ、豊かな関係を紡いできたのです。



せい か から こ もんはち
36 青花唐子文鉢
Bowl with Chinese Boys

兎と遊ぶ子どもたちが、輸入コバルトによる紫がかった青で描かれています。景德鎮の官窯で焼かれた作品です。



きちれい う ねんれいばなし
37 吉例 兎の年礼噺
Celebration: Story for the Year of the Rabbit

洋装の兎が和装の鶏に年始の挨拶に伺い、多忙さを自慢気に語る場面。当時の兎ブームを伝える錦絵です。